



国文学者

中西進さん

スペシャルインタビュー

Vol.13

生き生きとした人間模様が見えてくる 万葉集の魅力を再び

自分自身を分析し、歩む道を決めてきた国文学者の中西進さんは、還暦を過ぎてからの様々な経験を糧に、90歳の今も日々奔走されています。人生を謳歌するその秘訣を語っていただきました。

かは自分しだいです。くよくよと根に持っているも、自分を救えませんか、プラスにするほうが得策だと思います。

第一に自分を褒める

小学校を廻って万葉集を教えたころの話をしましょう。ある学校で学級崩壊をしていて、授業が成り立っていませんでした。そういう学級だと知らずにポツと行かされました。担任の先生は生徒たちに泣かされる。教頭先生が叱つてもダメ。校長が教壇に立つてもダメ。挙句に父兄が向いてもダメ。そういう学級だったのです。それでも、万葉を教え始めると生徒たちは沸きに沸いてくれました。私にとっては、未だに一番よくできた授業の一つです。

このことは、偶然ではなくその後何度も経験しました。今ではできないかもしれませんが、小学6年の授業で、短歌はどのようにして始まったかという授業をしました。その時は、校庭にチューリップが咲いていたので、その風景を元にして、「校庭に きれいに咲いた チューリップの花」と五七七にしました。そこで、「チューリップの花」をそのままにして、他を変えて続けて「らんと言いうと、「○○○○○○○○○○○○○○ チューリップの花」と一人が歌い、続いてもう一人が歌いました。これが古代の最初の歌の形でした。一人で歌うと、「チューリップの花」が

ダブってしまうので、第3句の「チューリップの花」の重複を解消させるようになり、五七七七七の短歌になりましたと教えると、生徒たちは納得して授業が盛り上がりました。

その授業で一番活躍していた子が、コミュニケーション障害だと言われました。校長先生から、「いつもは床に寝転がっているのに、あんな風に活発に喋ったのは初めてですよ」と聞かされました。

それで気付いたのは、だれもが素晴らしい人格を備えていて、それをいくつもの時に発見できるのが大きな違いになるということです。自分の持つ人格に早く気付いた人は、それを信じて将来に突き進めばいいと思います。もし、何をやってもダメだと思っても、必ずどこかで自分らしい人格を発見できると信じ、見失ってしまっている自尊心を取り戻してほしいですね。自分らしさはみんな必ず持っています。規範のようなものに押さえ込まれずに殻を破って自分の人格をさらけ出す。自分がダメだとは思わずに、自分で自分を褒めることを小中学生に教えてきました。それが自信となり、人格形成の始まりになります。

普遍でいることを楽しむ

私の人生は、自らを分析することから始まっているかもしれません。その結果、文学へ進もうと思いました。そして日本

文学が好きだから国文科をめざし、卒業論文を分析すると文学と語学に分かれるから語学を捨てて文学を選びました。さらに時代を選ぶと古代に興味湧き、他の時代を捨てました。そうして捨て続けることで深みに達し、そのプロセスが結局のところ普遍だと気付かされました。

例えば、地動説というのは普遍です。地動説を証明するためには、数学、天文学などの学問と呼ばれる壁を取り払い、行動学や人間学も必要かもしれません。それを突き詰めることが哲学です。哲学には特定の分野がなく、かつては学問そのものでした。「哲」は明らかにするという意味ですから、明らかにする学問ということ、すべてを意味するのでしょうか。

まず大切なのは自然な状態です。無意識の中では哲学のような総合体で、意識した時に分析され区別されます。人格、教養、品格もまさにそうで、「品」は区別するという意味です。

人間も年齢を重ねるにつれ、分析され区別されるようになりますが、その上で普遍であることを楽しむほうが、生き生きとした人生を送ることができるのではないのでしょうか。

昔、柳田国男が民俗学を発想したと言われている、宮崎県の椎葉村で、夜通し御神楽を見た時のことです。観客が自然に言葉が発し会話が成り立っていき、それがずっと五七七、五七七で続き、リズムに合わせて楽しんでいました。

人生の節目をプラスにする

私にとって、60歳代は人生のすべてが集約されたような時代でした。それまでは何もしていなかったような気がしますが、還暦を過ぎてから色々なことに打ち込んできたのだと思います。節目というようなことを言えば、必然的に人間は年齢を重ね節目を経過します。学校制度もその一つですし、定年もそうです。それらの数ある節目は甘受しなければならぬし、そうすることで生活の形式が変わります。けれどもその人自身は何も変わらないのです。人間は、生まれた時からの年月の足し算の中で、その時々環境をいかに生かすのかが大切だと思います。

私は18歳の時に、手遅れと言われた盲腸で死んでもおかしくない修羅場を経験し、受験に失敗しました。4ヶ月間の闘病で2回手術をして、お腹も3カ所切りました。お腹に傷が残るのは悪いけれど、気にすればすべて気になり、なぜ私だけがと妬(ねた)みや僻(ひが)みになります。

思い返せば、2回の転校でいじめではなけれどもからかわれました。東京から地方へ転校したら「都会から来たやつだ」とからかわれ、東京へ戻ると「言葉に変な方言が混じるからおかしいやつだ」とからかわれました。それでも、その環境を自分のプラスにするのか、マイナスにするのか

それこそが、人間らしい生活の知恵です。私が万葉集に惹かれるのも、歌が上手い下手ではなく生き生きとしているところ。だから、万葉集は読んでいて気持ちがいいのです。みなさんも、もう一度、万葉集を読んでみてください。

Nakanishi Susumu

1929年東京都生まれ。東京大学大学院博士課程修了、文学博士。国文学者。博士論文『万葉集の比較文学的研究』で読売文学賞、日本学士院賞を受賞。以後、比較文学、日本文化の研究で知られ、『源氏物語と白楽天』で大仏次郎賞、『万葉と海彼』で和辻哲郎文化賞。『万葉みらい塾』で菊池寛賞ほか受賞多数。2004年文化功労者、2005年瑞宝重光章。2013年文化勲章受章。日本学術会議会員、日本比較文学会会長、東アジア比較文化国際会議会長、全国大学国語国文学会会長を務める。主著に『日本の文化構造』『このころの日本文化史』などがあり、著書は『中西進日本文化をよむ』(全6巻)、『中西進万葉論集』(全8巻)、『中西進著作集』(全36巻)に多くが纏められている。